フーコーの(権)力論の歴史的脈絡

——教室の中の少年(インファント)／少女——

吉　田　直　希

I

ミシェル・フーコーが『監獄の誕生』において明らかにした権力論とは一体どのようなものだったのだろうか。[1] また，フーコー以後，この権力論はどのような展開をみせているのであろうか。本論では，いわゆる権力＝関係という考え方を視線の問題として捉え，近代以降の主体のあり方を検討しながらフーコーの権力論について考えてみようと思う。

まず，フーコーがこの本の中で取り上げている《一望監視方式》のからくりをみておこう。周知のように，この監視方式は，ベンサムが理想的な監獄のモデルとして考案した「パノプティコン」において実現するが，その機能は内部に監禁される受刑者に絶えず監視されていることを意識させるというものである。周囲に円環状の建物があって，中央には１つの塔が建てられる。塔には広い窓が付けられ，それらの窓は環の内側に向かって開かれているが，周囲の建物の方は独房に分割されており，そのそれぞれが建物の幅をそっくり占めている。そして，この独房には二つの窓が付けられるが，一つは塔の窓と向かい合うように内側を向き，もう一つは外側を向いていて，外からの

1. Michel Foucault, *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*, trans. Alan Sheridan (New York: Vintage Books, 1979), (ミシェル・フーコー『監獄の誕生—監視と処罰』田村俶訳（新潮社，1977年）〔本文の訳はこれに拠ったが，訳文を一部変更させていただいた〕) また，以下の「パノプティコン」に関する説明は，Foucault, *Discipline and Punish*, pp.200-202（邦訳，202—204頁）をまとめたものである。

光が独房の隅々にまで行き渡るようになっている。こうして独房に配置される受刑者は常に監視塔から「見られる」ようになる。後には，監視される者は受刑者に限られず，狂人でも病人でも生徒でもよく，その置き換えはほとんど無限に拡がるのだが，この問題は後で扱うことにする。さて，周囲の建物が独房に分割されていることから生じる一つの効果としてまず，隔離された状態で監禁される受刑者はすぐ側にいるはずの別の受刑者の姿を目にすることができないということがあげられる。受刑者が目にするのは建物の中心に位置する塔とその中にいる監視者だけということになる。ところが，この監視者の姿でさえ受刑者は直接「見る」ことができなくなる。というのは，中央の塔にある監視室の窓に鎧戸が付けられ，さらに，この部屋から外部に光が全く洩れ出ないようにと室内を直角に仕切る壁が設置されてしまうからである。したがって受刑者はいわば姿なき監視者を「見る」ことしかできない存在となる。ここにはもはや，通常の対面ではごく当たり前の《見る—見られる》という対等関係は成り立たない。受刑者の側には「見られる」力が圧倒的な強さで働いているため，監視塔を「見る」ことができるといっても結果的には「見ることなしに見られる」存在として位置づけられるからである。それでは，監視する者の立場はどのようなものであろうか。受刑者が「見ることなしに見られる」存在だとすれば，監視者はその逆，つまり「見られることなしに見る」存在として位置づけられるだろう。監視者と個々の受刑者は向き合って視線を交わすわけだが，監視者の姿は決して見られることがないため，あたかも受刑者の背後に立っているような錯覚を作り出し，受刑者に自分が絶えず監視されていると意識させることができるのである。

ところで，誰がこの「見られることなしに見る」という監視者の立場をとることができるのだろうか，言い換えれば，誰が特権的な監視者になれるのだろうか。実は，誰もこの絶対的位置を占めることはできないのである。たしかに，中央の塔にある監視室には一人の監督官がいて，この部屋から常に目を光らせ周囲の独房を見ているだろう。また，この監督官は受刑者だけでなく，施設内部の他の要素にも目を向けるかもしれない。すなわち，監獄内

で働く全ての職員 ── 看守，管理人，教誨師，教師，医者等々 ── をも見張り，この施設が正常に運営されているかどうかを瞬時に判断する。つまり，一人の監督官だけが「見られることなしに見る」ことができそうだ。ところが，この監督官の占める位置はすべての人に開放されていることが明らかになる。まず，この部屋には外部からある巡視官がやって来て，本当にこの施設が正常に運営されているかどうかを確認する。こうなると監督官でさえ，いつ自分が見られる存在になるかわからず，自分は絶対に見られないのだという保障はどこにもないことになる。さらに，受刑者に対して絶えず監視されていることを意識させるだけなら，監督官は誰であっても構わないことがすぐに理解される。「その管理責任者が不在であれば，その家族でも側近の人でも友人でも来訪者でも召使いでさえも代理がつとまる」というわけだ。[2] こうして，すべての人が「見られることなしに見る」ことができるようになり，逆説的に誰一人としてこの特権的位置に立つことができなくなるのである。さらに，ここで注目すべき点は，監視する者の視線がどのような欲望から発せられていても視線の持つ効果はいっこうに減らない（というよりむしろ強まる）ということである。極端な場合は単なる暇つぶしのためにこの監視室へやって来ても一向に構わないということになる。こうして，この姿なき視線の裏に潜む自由で多様な欲望をも吸い込んでしまう《一望監視方式》は，パノプティコンという１つの建築装置にとどまることなく，多様な置き換えを通して社会の隅々にまで拡散していくのである。ここでは，もはや暴力的抑圧の力は認められず，受刑者，狂人，病人，生徒等の服従化［＝主体化］は，視線がもたらすこの虚構的な力を利用することによってなされていく。

このように，『監獄の誕生』における権力論は《支配―被支配》という抑圧的図式を否定することから出発する。権力とはある特定の個人に還元されるものではなく，《見る―見られる》という一対の虚構的関係においてはじめて

2．Foucault, *Discipline and Punish*, p.202.（邦訳，204 頁）

現実化するということ，つまり，近代以降（現在に至るまで）人々が，視線の織りなすこの権力＝関係の直中に生きているのだということをまず意識化することが求められているのである。ここから様々な分野における《一望監視方式》の多様な置き換えを具体的に検討する必要がでてくるわけだが，そこでの権力＝関係の具体的な分析は，近代以降の個々人――研究者自身も含まれる――の主体化［＝服従化］をどう評価するかといった問題意識から行われていくものになるだろう。工場や学校や病院等における主体の形成過程を詳細に検討することにより，フーコーの権力論は多角的に捉え直され，そこから新たな出発が約束されるはずだからである。したがって，このような問題意識から提出された研究がフーコーの次の言葉を裏付ける試みとして十分な評価を受けなければならないのは間違いない。「監獄が工場や学校や兵舎や病院に似かよい，こうしたすべてが監獄に似かよっても何にも不思議ではないのである。」[3]

しかし，あまり先を急ぎすぎるのも危険であろう。たしかに，フーコーはこの本を「近代社会における規格化の権力ならびに知の形式に関する各種の研究にとって，歴史的背景として役立つはず」と自ら位置づけてはいるが，フーコーの出発点が工場や学校ではなく「監獄」であった点を考察してからでも，新たな出発は可能だと思われるからである。[4] そこでまず以下において，フーコーの権力論がどのような歴史的背景から出発しているのかを検討する。その際，主要なテクストとして浅田彰の「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」を取り上げるが，この論文は，ルイ・アルチュセールによる「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」の理論的業績を近代以降の主体形成の観点から見直し，さらにフーコーの権力＝関係という概念を積極的に評価した極めて重要なものである。[5] 次に，近代以降の主体一般が抱える問

3．Foucault, *Discipline and Punish*, p.228.（邦訳，227頁）
4．Foucault, *Discipline and Punish*, p.308.（邦訳，308頁）
5．浅田彰「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」（『思想』，1983年5月号）

題を「監獄」ではなく《学校》という主題から考察することにより，フーコーにおける「監獄」の意味をもう一度問い直すことを試みたい。

II

浅田によると，近代イデオロギーにおける主体の形成は2つのレヴェルにおいて行われるものである。その一つは，超越的中心から個々人がピラミッド型に配置される絶対的安定のレヴェルであり，もう一つは，終点のない競争に個々人が参加する永久運動のレヴェルである。近代以降の主体はこの二つのレヴェルが繰り込まれた社会において確立されるが，前者のレヴェルが後者のレヴェルに内在的に働きかけるため，二つのレヴェルが――というよりむしろ，両者の齟齬が――後者における運動に相対的な安定を与えているという点が重要であろう。もちろんこのような「奇妙な二重体」としての主体概念は，いわゆる《自己批判》以降の後期アルチュセール派を批判的に検討することから得られているわけだが，興味深いのは，アルチュセールが中断してしまった理論的作業をフーコーが引き継いで展開しているという浅田の指摘である。[6] つまり，この近代以降の主体概念はフーコーをも理論的背景とするものなのである。そこでフーコーの権力論を歴史的背景として位置づけるため，まずアルチュセールとフーコーの関係に注目してみよう。

さて，科学認識論から政治哲学への移行といわれるアルチュセールの《自己批判》とはどのようなものであったのだろうか。極めて単純化してその輪郭を示すと，前期アルチュセール派の理論的実践に認められる安定化を許す側面が，《自己批判》により徹底的に切り落とされ，後期アルチュセールの中

38―65頁。以下のアルチュセール派イデオロギーと近代主体に関する考察はこれをまとめたものである。また，アルチュセールとフーコーとの関係については第4節「批判的考察」，58―65頁が特に重要である。

6．浅田，「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，63頁。なお，浅田はこのような主体概念が構成される理論的背景として，フーコーだけでなくドゥルーズ＝ガタリの業績についても言及している。

心をなす《国家のイデオロギー装置》の分析がダイナミックに行われるようになったというものである。もちろん，ここでの「安定化」というのは，アルチュセールがヘーゲル的な全体性（同心円的全体性）に基づいて主体の分析を行っていたという意味ではない。《自己批判》以前のアルチュセールにおいてもすでに「《主体なし目的なしの過程》としての非直線的・不均等的な歴史という科学的把握」の要請は認められていたからである。[7] バシュラールの影響を強く受けていた前期アルチュセール派の科学的認識論は，マルクスの『資本論』を真の史的唯物論として位置づけ，これに対応する新たな哲学としての弁証法的唯物論の意味を見出したわけだが，重要なのは「《理論的実践の理論》」として定義された哲学の誕生の裏に，後期のダイナミックな運動（闘争）に参加する契機が認められるという点である。[8] ようするに，前期アルチュセールがバシュラールとの出会いからヘーゲルに別れを告げた時，彼は『資本論』を読んでいたのである。しかし，1回読んだだけではこの難解な本は十分には理解できないとわかった後期アルチュセールは，繰り返し『資本論』を読むことを実践し，バシュラールに見いだせる安定化の一面を切り落としたのである。こうしてイデオロギーのもつダイナミックな構造と機能を明らかにすることが第一に目指されるようになり，哲学は「理論的実践の理論」から，諸科学と理論的諸イデオロギーが明確に区分けしえない状態にある「理論」に断絶を迫るべく介入する「実践」へとその姿を変えていったのである。

それでは，後期アルチュセールを特徴づける二つの概念，すなわち国家の抑圧装置（ARE）と国家のイデオロギー装置（AIE）の概念にしたがって，近代イデオロギーのダイナミックな構造をまとめておこう。[9] 従来の国家論

7．浅田，「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，40頁。
8．浅田，「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，40頁。傍点は筆者。
9．浅田，「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，49頁。なお，AREとは，'l'Appareil Répressif d'Etat' を，AIEとは，'les Appareils Idéologiques d'Etat' を略したものである。

では，イデオロギーが既成の，いわゆる上部構造として位置づけられていたのに対し，アルチュセールは国家を《国家装置》と捉え直すことにより，新たな一歩を踏み出したのである。もちろんこの《国家装置》というのは，ARE と AIE を一つにまとめた概念である。浅田はここで次のような疑問を発する。「なぜ単なる装置ではなく国家装置なのか」と。[10] 重要ではあるが答は「自明」なものである。というのは，後期アルチュセールは，「経済の審級を特徴づける生産関係が生産手段を所有する非労働者をその要素のひとつとしてもつ場合，それに対応する社会構成体は搾取階級と被搾取階級の分裂を含む階級社会たらざるを得ないということ，そこでの再生産は階級分裂と搾取の再生産でなければならない」という認識に立っており，生産諸関係の再生産がスムーズに行われる装置を《国家装置》と定義しても不思議ではないからである。[11] 浅田によるこの指摘は,《国家装置》の概念がもつ重要性を明らかにしており，その後のアルチュセール理解には欠くことのできないものであるといえよう。前期アルチュセールにおいてはダイナミックに描き出せなかった「国家」が,《自己批判》における切断により,「社会構成体の統一」と「生産諸条件の再生産を保障する特別な手段」を同時に実現する《国家装置》として動き出すのである。したがって，次に考えなければならないのは，この《国家装置》の機能がいかなるものであるかということになる。さて，ここから ARE と AIE の具体的機能が分析されていくのであるが，アルチュセールは一体，何回『資本論』を読んでこの自明の事実に辿りついたのだろうか。また，浅田が提示した単純な疑問はどうして，「なぜ単なる国家装置なのか」という問いかけではなかったのだろうか。おそらく，この問いに対する答も先に引用した解答とほとんど同じものになるだろう。だが，その答え方 —— 抑揚のつけ方やスピード —— は微妙に違ってくるかもしれない。しかし，ここで立ち止まることはあまり重要でないだろうから，話を先に進めて ARE と

10. 浅田,「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，48 頁。
11. 浅田,「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，48 頁。

AIEの機能についてまとめておこう。

これら2つの装置の機能的特徴は，AREが強制的・暴力的に主体に作用するのに対し，AIEが懐柔的・イデオロギー的に働きかけるという点に認められ，経済的審級において一つの大きな矛盾であると考えられる資本家と労働者との階級分裂は，《国家装置》が働かせるこの相反する二つの作用によって説明し直されていく。もちろん，アルチュセールはこの概念を用いて，生産諸関係の分析に力を入れるわけだが，その手法が抱える様々な問題点についてはここでは扱わない。浅田が示している図式にしたがって極端な単純化を行えば，「AREは「究極的に搾取の諸関係である生産諸関係の再生産の政治的条件を，力（物理的あるいは非物理的）によって保障する」ことを役割とし，AIEはそのような「AREの《楯》の下で生産諸関係の再生産そのものの大部分を保障する」ことを役割とする」ものであるということになる。[12]

それではAREとAIEの機能をもう少し詳しく検討してみよう。AREとは具体的には「政府・行政機関・軍隊・警察・裁判所・刑務所から成る統一体」であり，公の場において抑圧的・暴力的に全体化を命ずるように機能する。一方，AIEは「宗教的・教育的・家族的・法律的・政治的・組合的・情報的・文化的等の諸形態のもとに，相対的自律性をそなえた諸装置」に分かれており，こちらの方は主に私的な場において柔軟なやり方で多様化を容認・促進するように機能する。[13] このことから，AIEを装置というレヴェルから捉えれば，それがARE同様に統一性をもっているということ，また自律性をもって多様に分かれているというレヴェルからみれば，そこには何らかズレの生じる可能性があるということがわかる。アルチュセールは生産諸関係の再生産をめぐる階級対立をAIEの中に見いだし，そこでの諸関係（のズレ）を闘いの場にしていくわけだが，重要なのは，彼がAREの抑圧的機能を全く無視してAIEを分析の中心に据えるようになったのではないという点であ

12. 浅田，「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，49頁。
13. 浅田，「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，49頁。傍点は筆者。

る。

さてここで我々は，アルチュセールが監獄（刑務所）を強制的・暴力的機能をもつAREの構成要素として位置づけていることに注目せざるをえないだろう。すでに述べたように，フーコーが記述する「パノプティコン」という《建築装置》は，個々人の主体化［＝服従化］を行う際に柔軟に機能しており，AREのもつ暴力的な圧力というよりむしろAIEのイデオロギー性を発揮する装置と言えそうである。ではフーコーは，アルチュセールが監獄(刑務所)をAREの統一体に含めている点を批判しているのだろうか。たしかにアルチュセールにおいてはAREとAIEの関係が相反する2つの作用と考えられていた。だが，イデオロギーすらも装置として捉えていたことに注目すれば，そのことが絶対的命令をもたらすAREの「抑圧」という機能にもズレをもたらしていることが認められよう。したがって「監獄」がそのイデオロギー的側面から詳細に分析された研究として『監獄の誕生』を評価することは必ずしも妥当ではないのである。そもそも，アルチュセールが国家を《国家装置》として自らの分析対象として位置づけた時に，「監獄」はAREでもありAIEでもあるもの，そしてAREでもAIEでもないものとなっていたからである。その意味において，浅田による「パノプティコンは，国家の抑圧装置のひとつとしての監獄の形態的モデルである以上に，国家のイデオロギー装置の機能的原理を示すのものである」という指摘がアルチュセール，フーコー両者における装置の概念を的確に表していると言えるのである。[14]

ここで，このことを前章で扱った視線の問題と関連づけて整理しておく。「見る」ものが実は常に「見られる」可能性を背後にもつ存在であるという点から，フーコーの権力論が《支配—被支配》の枠組みによっては説明できな

14. 浅田，『構造と力』（勁草書房，1983年）182頁。傍点は筆者。以下の《学校》に関する考察は，特に第6章「クラインの壷からリゾームへ」，211—235頁を参考にさせていただいた。なお，フーコーにおける「装置」の概念については以下を参照。Gilles Deleuze, *Foucault*, trans. Seán Hand (Minneapolis: Minnesota Univ. Press, 1988) pp.23-44.

いということはすでに確認した。そして今，この権力＝関係の概念をアルチュセールによる《国家装置》の分析との関連で捉えようとするなら，それが単純に抑圧的図式を否定するものではないということが理解できるだろう。つまり，《見る—見られる》という関係をダイナミックに展開させて分析するには，アルチュセールの《国家装置》概念がフーコーの権力論においても明確に意識されているということを確認しなければならないのである。したがって，我々がフーコーの著作を自らの歴史的背景として位置づけようとすれば，同時に，アルチュセールの業績をも歴史的背景として認めざるをえないわけだ。『監獄の誕生』におけるパノプティコンが，このように捉え直されてはじめて，《一望監視方式》による近代以降の主体化をダイナミックに検討できるのである。

こうして我々は，パノプティコンという一つの《建築装置》において一応の完成をみた《見る—見られる》という関係がもたらす主体の形成過程をダイナミックに捉える地点に立つことができた。と同時に，この《見る—見られる》という関係が相対的自律性を備えている様々な装置においていかに展開されているかを検討することは，もはや，個々の分野における規律や訓練の独自性——パノプティコンの場合とは異なる自律性——を時間的に辿って調べることではなくなる。アルチュセールがすでに述べているように，AIEはそれ自体のなかではすべてが力関係なのであって，宗教的・教育的・家族的・法律的等，諸装置の単なる統一（あるいは分散）体ではないからである。また，ここで「イデオロギーの内部にあって絶えずイデオロギーにとりかこまれていることを自覚しつつ，しかも，切断運動を続けながら自らの位置をずらせていく」悦びと苦痛を感じていたであろうアルチュセールの姿を想像するなら，フーコーにおける権力＝関係を単なる歴史的拡散の観点から問題にすることはできないだろう。[15]『監獄の誕生』における《一望監視方式》はた

15. 浅田，「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，57頁。

しかに近代以降，主体化を行う様々な装置でその応用をみるわけだが，フーコーの「監獄」は我々が戻らねばならない重要な出発点でもある。そこで次に，近代以降の監獄たる《学校》を舞台にくりひろげられる《見る—見られる》関係を考察することにより，フーコーの「監獄」を別の角度から検討してみることにする。

III

ここでは，近代以降の主体化一般の問題を《学校》という主題から検討する。まず，AIE における諸イデオロギーが常に同じ構造をもつというイデオロギー一般の構造に関するアルチュセールの図式からみておこう。すでに述べたように AIE の自律性はあくまで相対的なものであって，そこには何らか共通の構造が認められるのであり，この点を見落として個々の具体的イデオロギー装置を分析しても，ズレの意味が十分には把握できなくなり，まさしくズレてしまうおそれがあるからである。また，近代的主体に作用する AIE 一般の構造を簡単にみておくことは，フーコーの権力論を理解する上でも必要な作業である。なぜなら，浅田による近代の主体概念は以下にまとめるアルチュセールのイデオロギー論を批判的に検討した結果得られたものであり，またその批判が「フーコーやドゥルーズ＝ガタリの業績を参考に」しているとされているからである。[16]

さて，アルチュセールにおけるイデオロギー一般の構造は，ラカンにおける象徴秩序の構造とほとんど同型のものであると言ってよい。象徴秩序の構造つまり象徴界における主体の形成は次のようにしてなされる。極めて不安定で本能のおもむくままに行動しようとする幼児 —— 主体となる以前の人間 —— はある時には厳しく叱られ，またある時には自由を与えられ，すくすくと成長し大人 —— 主体 —— となるのである。もちろんここで重要なのは，幼児の前に姿をあらわし(というよりすでに自分より前に存在していて)，禁止や

16. 浅田，「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，62 頁。

容認の言葉を投げかけるのが，絶対的他者としての《父》であるという点である。この《父》はまた《父の名》とも呼ばれる存在であり，個々人は他者との危険な直接的関係によってではなく，象徴としてのこの《父》を経由して自己の安定性を獲得するのである。一方，アルチュセールが考える主体――生産諸関係の再生産を支える労働者――もラカンの場合と同様，絶対的他者を媒介として自らを主体化する。もちろん，アルチュセールにおいては，幼児に対する《象徴的な父》という表現は用いられず，「イデオロギーは諸個人に呼びかけて主体にする」と定義されている。[17] しかし，ここでも個々人に呼びかけを行う――禁止や容認の言葉を投げかける――のは，唯一の超越的存在つまり抽象的な神のごとき存在であると捉えられている。このようにして，ラカンとアルチュセールは出会うわけだが，アルチュセールにとっての出会いが，すでに別れを予感させるものであったことを考えれば，ここにみたイデオロギー一般の構造分析は，一つの大きな理論的業績であると同時に，その後の批判的検討をダイナミックに展開させる闘争の場となる可能性をもっていると言えよう。したがって，「フロイトとラカン」における「子供が十全な意味で象徴秩序に参入して subject となるまでには長い苦しい闘いが闘われねばならないのである。そして，この闘いには終わりがないのだ……」という一節はまさにアルチュセールによる新たな《自己批判》とも読めるのである。[18]

ここにおいて浅田は近代以降の《学校》における生徒の主体化という問題をとりあげ，アルチュセールによるこの《自己批判》を一層強力なものにしようとする。まず，イデオロギー一般の構造からもわかるように，アルチュセールの「学校」には大きな欠点が認められるだろう。つまりここでは，伝統と格式を重んじるあまり，生徒の自主性を尊重するといった自由な雰囲気が損なわれているのである。教師は絶対的他者である超越的中心としてすで

17. 浅田，「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，55頁。
18. 浅田，「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，61頁。

に教壇に立っており，生徒はいわばピラミッド型に配置されている。ようするにアルチュセールのイデオロギー一般の構造では真の意味での近代的主体を描き出せないということになるわけである。そこで，アルチュセールの《自己批判》を真摯に受けとめて浅田が提示する《学校》は，ダイナミックな闘争が繰りひろげられる競争の場としての《学校》となっている。《一望監視方式》を導入する必要もここに認められるのであり，こちらの《学校》ではモデルとして，あるいは媒介としての厳しい教師は表面的には姿を消してしまうのである。こうして，「パノプティコン」的な《学校》は「全員を一方向の量的な運動過程へ駆り立てるというダイナミックな安定化」を支配的イデオロギーとして機能させ，生徒を絶えることのない競争過程へと吸い込んでしまう。[19] 毎回の定期試験においてトップの座を守りつづけることは極めて難しくなり，また今まではビリであっても，次回は頑張れば下から5番目ぐらいには上がれるかもしれないという雰囲気が感じられる《学校》の誕生である。それでは，浅田が描くこの《学校》の教室をちょっとのぞいてみよう。ここでは，監督者である教師は教壇にはもはや見つけられず，教室の後ろにいそうだというだけの存在になっている。

> ここは第一の教室よりずいぶん自由な感じがする。事実，少々さぼって手あそびしたりしていても，うしろから叱声がとんでくる気配はない。どうやら，ちょっとした遊戯は黙認されているらしいのだ。増長してだんだん派手なイタズラを考えるうち，しかし，子どもたちは何となく背後が気になりはじめる。もしかしたらボクはうしろから目をつけられているんじゃないだろうか。[20]

見られているのではないかと感じるこの生徒は，不在の視線を自己の内に内面化し，自分自身の監督者となっている。つまり，ここでは監視する者とされる者を自身の内に繰り込むことにより，主体化という教育が行われている

19. 浅田，「アルチュセール派イデオロギー論の再検討」，62頁。
20. 浅田，『構造と力』，212頁。

のである。教師の影は極めて薄いが，それは，この教師が，ラカンのいう《象徴的な父》やアルチュセールの《呼びかけを行う媒介》にみられた超越的な絶対性をほとんど有していない証拠であろう。だが，というよりはむしろ，だからこそ，生徒は自らに与えられた自主性を発揮し，支配的AIEの機能を体現するようになるわけだ。さらに，平等をたてまえとする自由競争の原理は学校内にのみ限られるものではなく，ここから次第に拡散していく。めでたく学校を卒業し，会社に入ってみると，実はそこが新しい「学校」であったと気づく者も多いのではないだろうか。もちろん，この新しい「学校」はそれ独自のやり方を用いて個々人に主体化を促すわけだが，たとえば新入社員研修で次のような訓辞が聞かれたとしても，《学校》のもつ支配的AIEの機能は少しも衰えることはない。「ここはもう学校ではありません。皆さんは……」。

ところで，「第一の教室」というのは近代以前の学校における教室だが，もはや，その安定性は指摘するまでもないだろう。教壇には厳格な教師が立っており，常に教室全体に目を光らせているため，生徒のささやき声すら聞かれることはない。つまり，ちょっとした遊戯すら許されず，ましてや派手なイタズラなどもってのほかとなっているわけだ。さらに，この教師は《教師の名》によって生徒の主体化を行うわけだが，教師からの呼びかけに絶えず答える生徒によって教室内の秩序は保たれているのである。

さて，近代的イデオロギーが作用する教室と前近代的モデルが支配的な教室の比較をここにみたわけだが，すべての学校がこのどちらかと全く同じ形式をとることがないのは言うまでもない。重要なのは，2つのモデルの移行が連続的に行われたのではなく，さらなる運動（闘争）を展開させるために，いったん「切断」がなされているという点であろう。たとえ表面的にゆるやかな移行が記述しえるとしても，そこには大きな断絶があったのだということは確認しておかなければならないのである。ラカン―アルチュセールにおける主体化のモデルの内にすでに，後のダイナミックな主体形成を描き出す契機があったことを指摘し，フーコーの業績をその単なる継承的作業と捉え

てしまってはアルチュセールの《自己批判》を十分に理解していないことになる。また，アルチュセールのイデオロギー一般の構造分析にみられる安定的側面をフーコーが徹底的に批判したという見方もやはり妥当性を欠くことになるだろう。ここには，いわゆる「批判的継承」というスタイルに関する重要な問題が提起されていると思われるが，この問題については機会を改めて検討したい。ただ少なくても，フーコー—浅田が近代的主体の形成過程を考察する際に，前近代のそれをも同時に強く意識化していたということだけは見逃してはならない。

この点を確認した上で，再び前近代の学校に戻ってみることにする。ここで注目しなければならないのは，もはや《教師の名》において生徒を主体化する厳格な教師の姿ではない。そもそも，この教師は威圧的な目で生徒を睨みつけているようでも，実はすべてを見ているわけではないからである。板書するため後ろを向いたとき，一人の男の子がさっと立ち上がりこの教師の物まねをしてみせ，みんなのクスクス笑いをさそう。後ろの方にいる男の子はこっそり隠し持っていた菓子を口にする。机に立てかけた本のかげで気づかれないようにいたずら書きをしていた女の子がふと窓の外に目を遣り遠くを眺めている。学級委員の女の子はよそ見などせず，黒板の方を向いてノートをとっているかもしれないが，ともかく，このような光景が展開されうるこの教室にはそれなりの自由があったのである。そしてこの自由が，近代以降の教室で見かけた手あそびとは全く異質のものであることは間違いない。とはいえ，我々は今ここで前近代的な教室に戻って，いたずら好きの男の子に回帰することを単純に肯定することはできないし，またそうしてはならない。前近代におけるこのような祝祭的空間やそこでの遊戯の意味を全く否定するわけではないが，こうしたスリルある侵犯的行為をこの教室が最終的には包摂してしまうからである。だから近代人はまさに浅田の指摘する通り，「不幸な道化」になってしまっているのである。[21] それでは，もはや後戻りする

21. 浅田，『構造と力』，214 頁。

ことのできない我々は一体どこへ向かえばよいのだろうか。浅田はここで「第二の教室にいる子供たちが目指すべきは，決して第一の教室ではなく，スキゾ・キッズのプレイグラウンドとしての，動く砂の王国なのである」と我々に呼びかけている。[22]

このように，フーコーの権力＝関係という概念を用いてアルチュセール再検討を試みた浅田は，この誘いの言葉により，自らがアルチュセールを批判的に継承し，さらなる運動に向かっていることを提示する。つまり，近代西欧における主体一般をめぐるアルチュセールの闘争は近代以降の権力＝関係のダイナミックな分析へと力を与え，さらにフーコーの理論的作業によりスイッチバックしながらも闘争に加速をつけていること，しかも速度を増したこの新たな主体はアルチュセールの《目的なし主体なしの過程》を全く別のやり方で実践していることが示されているのである。この新たな主体（浅田は「良きギャンブラー」とも呼ぶ）は，前章の冒頭ですでにみた二つのレヴェルを反復横飛びするのではなく，外へ外へと出て，「舞踏」する。[23] 広大な砂漠に一人飛び出した者は，極めて孤独な存在ではあるが，空しい反復運動の代わりに自由な遊戯を実践する悦びを知りつくしているというわけだ。したがって，必要なのは，外へ出る勇気と踊り続ける体力を身につけることであろう。「動く砂の王国」はすぐそこにあるのだから。

Ⅳ

ところで，教室の片隅で，机に本を立てかけ，こっそりとイタズラ書きをしていたあの少女は今，どうしているのだろうか。学校はもうすっかり様変わりしてしまい，以前の学校がどんなであったのかを思い出すのも難しくなってしまった。教壇から教室の後ろの方へと歩いていった怖そうな先生はもう戻ってくる気配もない。窓の外へふと目を遣ると，何やら新しい遊び場

22. 浅田，『構造と力』，227頁。
23. 浅田，『構造と力』，228頁。

が突如出現していて，そこでは何人かの元気な男の子たちが見慣れぬ踊りを楽しそうに踊っている。アスファルトの校庭だったはずなのだが，地面は何だかサラサラとしていて，とても気持ちよさそうである。外からの誘いの声に対して彼女は席を立つ勇気が持てるだろうか。あんなにも素早く，つまづくことなく踊り続けることができるだろうか。ここで，この少女とともに本論の出発点となったフーコーの「監獄」についてまとめておこう。

まず，後期アルチュセールにおける「国家」が《国家装置》であったように「監獄」が一つの建築装置として定義されていた点を忘れてはならない。「監獄」はいわゆる刑務所とは全く異質のものであるが，それはイデオロギー的側面からだけでは捉えきれない「監獄」の装置性によるのである。つまり「パノプティコン」から《一望監視方式》の機能を単に抽出するだけでは不十分であり，まずもって「監獄」が誕生する必要性を考えなければならないのである。したがって今後，学校や工場や病院等，様々な装置におけるズレを考察する際にも，ここでの「切断」の意味をアルチュセールと共に，あるいはフーコーと共に考えていかねばならないだろう。なぜなら，我々がアルチュセールを批判するのであれば，その批判が彼の《自己批判》と全く同じものになるはずがないからである。

次に，こうした「切断」から得られる運動（闘争も逃走も含む）の力が内へ入るにしろ，外へ出るにせよ，批判の対象を常に内在化している点に注目しなければならない。《一望監視方式》の驚異的拡散という点から近代以降の主体化を論ずるのであれば，またいわゆる刑務所が現代社会において示す係数の低さを考えれば，アルチュセールの指摘にしたがい，フーコーは《学校》の誕生を記述してもよかった――あるいはそうすべきだった――と思われるからである。もちろん『監獄の誕生』は《一望監視方式》のみを扱っているわけではない。学校に関する指摘も数多くなされているが，フーコーはまさに「監獄」の誕生を問題にしたのである。さらに，浅田がダイナミックに提示する近代以降の学校風景が極めてパノプティコン的であることからもわかるように，我々は学校のイメージを通してフーコーの「監獄」へと戻ってい

るのである。時間的には，前近代へと。そして，このことから，前近代の「監獄」も《支配―被支配》という抑圧的図式によっては説明しつくせないものとなってくるのである。このようにして，古い監獄ですら権力＝関係の観点から検討せざるをえないことが示され，フーコーの「監獄」はまさしく歴史的背景となるのである。そしてこれらのことを踏まえて，つまり，アルチュセールにより国家が《国家装置》と定義され，フーコーによって権力が関係として捉えられるようになったことを強く意識してはじめて，我々は浅田のように外部へ，真の意味での外へと向かうことができるのである。

ただし，権力＝関係の分析は，フーコーの理論的作業であるだけでなく，同時にフーコー流の実践でもあるという点を見落としてはならない。この点を抜きにして，真の外へ向かうことはできず，かえって権力＝関係をとりまく複雑な絡み合いがますます見えなくなってしまうからだ。フーコーの権力論は《支配―被支配》の構図では理解できない。だが，《見る―見られる／支配―被支配》の２つのレヴェルを図式的に示しただけでは，我々の取り組む課題が大きくなったというだけであろう。そして，そこから力をもって外へ，外へと飛び出した者が現れたと知るだけであっては，それはあまりにも空しい理論である。

それではここで，浅田が逃れ出た「砂の王国」が我々のすぐそばにあったことを思い出してみよう。そこにいる子供たちは，理想と現実を同時に楽しみ，二つのレヴェルのズレを笑い飛ばして楽しく踊っているのだが，一体，誰がこの「砂の王国」というプレイグランドに飛び出すことができるのだろうか。ここで，誰が「スキゾ・キッズ」になれるのか，という問題について考えてみたい。答はもちろん「自明」なものである。実は，誰もこの「幸福な道化」にはなれないのである。というのも，我々はもうすでに「パノプティコン」のからくり――それがコロンブスの卵であったこと――を十分に知っているからである。

もちろん，浅田の主張はある意味では間違っていない。近代以降の主体一般が抱える問題を考察し，そこから新しい主体の誕生を実践する姿は十分に

評価されなければならないだろう。しかし，こうした新しい主体の実践スタイルが多様であるなら――砂の王国の踊りがワンパターンであることはないだろう――そこでのズレも，もう少し立ち止まって見つめなければならない。「幸福な道化」には誰もなれないと述べたばかりだが，この部分を「誰でもがなれる」あるいは少なくともその可能性はあると言い換えてもよい。というのは，この「幸福な道化」とは，《見る―見られる》という関係によって主体化がなされたいわゆる人間とは切り離された存在であり，いわば非人間的主体であるからだ。したがって，「切断」がなされれば，誰でも「スキゾ・キッズ」――コンピュータ・チップをつくるアジアの女性の化身でもあるサイボーグのように，この新しい主体は複数の主体でもある――になれるが，その「切断」作業を行わなければ，いつまでも人間的主体にとどまるということになるのである。

ようするに，『監獄の誕生』において明らかにされる権力論とは《見る―見られる》という視線の問題を分析するだけでなく，その関係をもダイナミックに変えるものであったのだ。浅田が主張するように，「砂の王国」のモデルを近代以前の「学校」にもとめることはたしかに反動的である。この教室で許される遊戯は，空間的にも時間的にも極めて限られたものであり，ここでの遊戯がどんなに自由なものであっても，それは超越的な絶対他者がすでに存在することを認めているからである。しかし，この王国で踊る子供たちの姿を想像するとき，教師のスキをみて，素早く後ろを振り向きユーモラスに物まねしてみせたあの男の子を思い描くことができないだろうか。少なくとも，私はそうした男の子の姿を想像してしまう。もちろん，彼らが見る／見られるという二元論の内にあって超越的な地点を探し求めているわけではないが，こうした二元論を越えた《外部》にいる新たな主体が，理想的な目を輝かしていないともいえないだろう。また新しい主体は「良きギャンブラー」とも呼ばれていたが，それはあの男の子のように一瞬のスキをつく才能を兼ね備えているからだ。だとすれば，「見る」意味を全く新しいものに変えてしまう力を「スキゾ・キッズ」はフーコーから得ているのではないだろうか。

ここには《一望監視方式》の展開をまさに「一望監視」の下に鮮やかに描き出すフーコーの力が認められるのである。

しかし，もしそうであるなら，つまり，新しい「見る」目をもつことが実践されうるのだとすれば，《見る—見られる》関係は別の角度からも切ることができるはずである。切られるはずだと言ったほうがいいかもしれない。つまり，新しい主体の誕生は見る／見られるを越えた《内部》で，極めて現実的な目をみせることでも実践されうるのである。というのは，自分が全てを見ていると思った瞬間に，もしかすると自分は誰かに見られているかもしれないと主体が感じるのであれば，新しい主体が「見られる」ことに多様な意味を探ることによって，見る／見られるという二元論を崩してしまっても全く不思議ではないからだ。もちろん，こうして誕生する新しい主体が全く何も「見る」ことがないというわけではない。ただ，少なくとも「砂の王国」にいる子供たちとは違う目をしており，外へ出て舞踏することもない。このような新しい主体は，教室で背筋をピンとのばして黒板を見ていたあの学級委員の女の子に似ているかもしれない。彼女はバレエも踊れるのだ。だが，ここで外に出て舞ったりはしないだけなのである。《一望監視方式》を鮮やかに描き出すフーコーは，「見られる」ことにも同時に力を与えているはずである。だから，教室で教師の物まねをしていた男の子が，ある日突然，全女生徒の憧れの的になっていたら，それはちょっと危険かもしれないのだ。ここで，アルチュセールによるラカン批判をもう一度思い出してみよう。「子供が十全な意味で象徴秩序に参入して主体となるまでには長い苦しい闘いが闘われなければならない」ように，主体が新しい主体に変わることもそれほど簡単にはなされないが，かといって決して実現しないわけでもないのである。

以上で，『監獄の誕生』における権力論の考察をひとまず終え，次の三点を指摘することにより，本論からの新たな出発点としたい。まず，近代以降の主体化に関する問題を検討するには，様々な具体的レヴェルでフーコーを歴史的に捉え直す必要がある。新しい主体のあり方を提示した浅田は，アルチュセールのイデオロギー論を考察することから，フーコーの権力論にさらなる

「切断」の必要性を見いだしている。つまり，闘争（逃走）運動には「切断」する力が必要であり，この力が理想と現実のズレをユーモラスに笑いとばす悦びを与えてくれるというのだ。だが，「切断」には様々なスタイルがあるのだから，この作業の結果が同じであっても――新しい主体はもはや肉眼では確認できないほど微細に切り刻まれるだろう――そこでの切り方にもう少しこだわってもよいはずである。こう考えるのはあまりに日本人的すぎるだろうか。ただ少なくとも，「切断」の過程で性的差異の問題を見落とすことはできないであろう。新しい主体がジェンダーを超えた複数の主体であるなら，「見られる」と「見せる」の微妙なズレを詳細に検討する必要がある。何も女性が常に「見られる」立場にあるというのではない。浅田が分析する前近代的な絶対他者はそもそも「見られる」存在でもあったわけで，この点からの研究は今後ますます重要になると思われる。[24]

次に重要なのは，フーコーが提示する権力＝関係の概念は浅田の理解するように極めてダイナミックに展開されてはいるが，そこで中心的に扱われている問題が近代以降の西欧における主体化に関するものであったという点を見落とさないことである。アルチュセールのイデオロギー一般の構造分析にみられたスタティックな一面はそう簡単には否定できず，また浅田のいう新しい主体がグローバルな――もはや地球レヴェルにとどまることはないだろう――ものであっても，そこはかとない余韻が「切断」に残るのは当然である。世界的な資本主義における日本の視点からもう一度「ダイナミック」のニュアンスを検討する必要があるのではないだろうか。[25]

最後に文学について一言。パノプティコンにおける《一望監視方式》はそ

---

24. 18世紀における女性の表象をフーコー的視点から捉えたものとしては次の文献を参照されたい。今井裕美 "The Representation of Human Beings in the 'Interpolated Episodes' of *The Seasons*"（『試論』第32集，1993年）1—16頁。
25. アルチュセール以降の西欧における批評理論の状況とその問題点については次の文献に簡潔にまとめられている。大田信良「解釈について――デリダと理論の位置――」（『秋田英語英文学』第33号，1991年）32—44頁。

もそも視線がもたらす虚構的な力を利用して行われる服従化［＝主体化］を出発点としていた。それでは，いわゆるフィクションである文学作品はどのように捉えられるのだろうか。作品中に《支配―被支配》の構図を設定し，そこでの局所的な転倒を見いだすことはもはや重要ではない。新しい主体を目指すのであれば読み方も多様となるわけだが，作品の中に逃走のモデルを探るのではなく，そこでの「切断」のスタイルの多様性，複数性を忘れないことが重要なのではないだろうか。つまり，ちょっと立ち止まってみることも必要なのである。